

ウガンダ 子ども兵士リハビリ施設現地調査

ウガンダ北部のグル(Gulu)は、戦争を本当にしているのかと思うほど穏やかでしたが、グルの町に入る少し前から国内避難民キャンプのいくつか姿を現し、戦争が行われているという感覚にとらわれました。

グルでは、宗教や文化への固執が強いため、宗教的指導者や文化的指導者の存在も無視できない状況にあります。この地域では、文化的指導者による MATO OPTO (和解の意味) といわれる伝統的な方法によって、子どもたちを社会復帰させる試みが行われています。しかし、MATO OPTO の対象にもあげられず、コミュニティから拒否をされた子どもたちの方が多いように感じました。特に親を亡くした子どもたちは、特に社会復帰が難しいようでした。

また、すべてがというわけではありませんが、文化的指導者や宗教的指導者は、まるで競争でも行うように活動をしているため、協調性が失われているように感じました。しかし、元子ども兵士への風当たりは強く、ある程度の年齢が上の元子ども兵士は、トラウマよりも社会復帰後のことを大変心配しており、そのことで食欲不振などになる子どもが多いようです。

また面白いことに、元子ども兵士は、あまりウガンダ国軍に興味がなく、もし戻るのであれば、ジョセフ・コニーが率いる「神の抵抗軍(LRA)」に戻るとの意見がありました。なぜかと訊ねると LRA は、コニーの「聖なる魂(Holy Sprit)」に守られているので死ぬことはないからだとのことでした。元少女兵士に関しても、子どもを抱えているにもかかわらず、レイプはされていないという意見が多かったように感じました(インタビューはあくまでも、ボランティアで行いました)。

子ども兵士の支援は、GUSCO と World Vision がメインで活動をしている状況でした。ローカル NGO の活動ですが、やはり、宗教を中心としているところが多いようです。また、国

際 NGO も多く入っていました。これからどんどん増える様子でした。しかし、彼らが行っていることは、元子ども兵士に対する活動、トラウマケアなどを中心とするものであまり、コミュニティと結びつけてという感じでなかったように感じます。また、元少女兵士を中心とした職業訓練所では、機材が不足しており、お粗末な状況でしたが、何かをしようと努力をしていることは伝わってきました。(報告: 入原稚奈)

ストップ子ども兵士アクションキャンペーン

今年1月より、現代紛争の象徴と言われる「子ども兵士」、紛争の長期化する原因ともいわれる「子ども兵士」について、ただ「なくす」ことを目的とするのではなく、子ども兵士の完全な社会復帰と平和構築を目的とするキャンペーンを企画しています。このキャンペーンの主な内容としては・・・

- (1) 日本国内での関心喚起
- (2) 国際社会への提言
- (3) 直接支援

以上の3本柱で行っていかうと考えております。どうぞよろしくお願いたします。

また、皆様に子ども兵士に関する企画などの情報を近いうちにご報告できればと考えております。

ストップ子ども兵士アクションキャンペーン ボランティア募集

一緒に活動し、キャンペーンを盛り上げてくださるボランティアの方を募集しております。

- **翻訳ボランティア** 本などの翻訳作業(英語)
- **レポート・文献の選出ボランティア** 日本にはあまり子ども兵士に関する書籍がないため、ARC の Web 上で紹介ができる書籍・レポート・文献を検索、選出する作業(英語)
- **政策提言活動ボランティア** 提言活動のアプローチ、提言書の作成などをワーキンググループに加わり一緒に作業してくださる方。

経験があり興味のある方、経験はないが興味がある方。誰でも参加できます。よろしくお願いたします。

スーダン「国際協力セミナー」参加者との意見交換会 報告

国際協力機構(JICA)は、今年1月「南北包括的和平合意(CPA)」を結び、21年に及んだ南北内戦を終結させたスーダンから、国際協力の担当者ら10人を日本に招待しました。この研修は、日本の援助方針・手続きについての知識を深めるとともに、南北両者間の和解を促進することを目的とするものでした。

そして JICA により、CPA 後のスーダンの状況を直接スー

ダンの方から聞き、今後の開発・方向性について意見交換を行う機会を設けられ、増古剛久・ARC 研究員が出席しました。

開催日時: 6月9日(木) 14:00~15:30

場所: JICA 東京国際センター

スーダンからの参加者の所属:

スーダン政府(北): 外務省、国際協力省等

スーダン人民解放運動(SPLM)(南):

議長顧問、SRRC 等

2005年1月9日に締結された、包括的和平条約(CPA)を経て、日本政府は、外務省、JICAともODAを再開することとなりました。そのために、日本の援助スキームというのとはどうなっているのかをスーダン人に学習してもらうために、北側の政府系の人間と、南側のかつての反政府系団体を5人ずつ日本へ招待しているというわけです。今回は、この機会を生かしてのセミナー開催となりました。セミナーでは、当初、北側(政府系)南側各々の報告が、スーダンの歴史や現状だったので、こんな教科書を読めばわかることを聞きに来たのではない、と思いましたが、質疑応答ではこれからどうするのか、みたいな話になったので興味深かったです。

まだまだ、南北とも具体的にどうしていくのか、という議論にはならず、「スーダン人はひとつの国としてまとまるのか」とか、「『一国二制度』という国家をなんとかしなければならぬ」というような段階といった印象でした。

出席者は、研究者、外務省、NGO関係者など様々でした。私があった中では、スーダン北側の外務省日本担当官Mr.Monday氏はとても良い人でした。彼の報告では、「CPA後とにかくピザが取りやすくなったからスーダンへ来てください」ということです。彼に名刺を渡して、ARCの紹介をし

た後、「ピザは本当に取りやすくなったのか？以前のピザ申請を見たら、ヤル気をなくすくらい面倒だ」と言ったら、笑いながら、「大丈夫、大丈夫」と言ってくれました。

また、「NGO活動をするにあたって、信頼できるコンタクトパーソン、ローカルNGOを探すのに苦労する」と言ったところ、「NGOが活動してくれるのは、とても嬉しい、スーダンに来るようなら、連絡をくれ、力になる」とのことでした。

南側のスーダン人民解放運動側の人間、Mr.Janta氏にも挨拶をした後、NGO活動に関して話をしたところ、北側の女性、サンドラ氏を紹介されました。彼女は、南側の人間にも信頼があるようです。彼女に挨拶に行き、ARCの紹介をしたら、感心を持ってくれました。彼女は、平和のためのスーダン女性のエンパワーメントという活動のプログラムコーディネーターでしたので、ARCが今ルワンダでARTCFと共同で行っている活動の理念と非常に似ているものを感じたそうです。彼女は非常に人脈が広く、中立的で信頼できる団体や人物を多く知っているようで、アメリカやヨーロッパからも資金を受けて色々活動しているそうです。「スーダンでARCが何かやる時は力になるので、ぜひ連絡をくれ」とのことでした。

(報告：増古剛久)

ルワンダ クリニック支援活動の近況

現地協力団体ARTCF事務所に併設されているクリニックでは、「公益信託アフリカ支援基金」の助成金によって、医療器具や医薬品を購入しました。ただ当初顕微鏡を購入予定でしたが、あまりにも高額であったため(見積もり時より値上がりした)今回は顕微鏡を諦め、その分医薬品を多く購入しました。患者数も昨年の今頃に比べ、倍近く増えました。2004年4月~5月の患者数が58名だったのに対し、2005年4月~5月の患者数は97名であったとの報告をうけました。地方から

の患者も多くクリニックに来ており、朝テストを受け、午後結果をもらいにくるということが頻繁に行われているようです。また、患者数が増えることでHIV/AIDSの予防教育が今まで以上に活発に行える状況にあると思います。看護婦が酔う再訓練所やバナナ工芸品訓練所へ出向きHIV/AIDSについての予防教育を行っているようです。ARTCFの事務所に行くたびに、患者がテストや治療を待っている状況で、2月の時に比べると大きな違いがあります。

(報告：入原稚奈)



アフリカ平和再建委員会 (Africa Reconciliation Committee: ARC-JAPAN)

〒160-0004 東京都新宿区四谷4-6-1四谷サンハイツ511

Tel/Fax: 03-3351-0892 E-mail: info@arc-japan.org

ホームページ <http://www.arc-japan.org>